

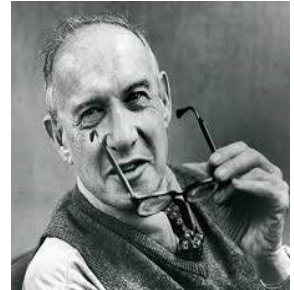
「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～再登場！予見者ドラッガーと2024年からの1万円札の顔、渋沢栄一～

昨年の通心（信）第30号で、日本観光振興協会理事長の久保田穰さんの「私（個）の利益」ではない「公（おおよけ）の利益」という視点や「ピンチはチャンス」という物事の捉え方を紹介しましたね。

そこで、再び「マネジメント」という概念を考えた人物もあり、予見者でもあるピーター F. ドラッカーがこの通心（信）に登場です。

企業の「利益」についてこう述べています。



「その利益、社会に役立つか！」

この見出しは、令和2年9月10日の日本経済新聞の一面に掲載されました。

コロナ禍を機に、配当などの株主の利益ではなく、企業の社会的責任を果たすために優先的に利益が使われているか、という観点から株主が声をあげだした実態を伝えるものです。

株主第一主義から様々な利害関係者（ステークホルダー）を重視する方向へ明確に舵を切る様は、本格的に企業と社会が直接向き合う時代への幕開けを意味します。

ドラッガーは利益について、

「利益は個々の企業にとっても社会にとっても必要である。しかし、それは、企業や企業活動にとって、目的ではなく条件である」と『マネジメント』で述べています。

つまり、企業活動の目的は、利益を上げることでなく、社会にとって必要な製品やサービスを供給することです。その目的を果たすために利益を上げることは必要不可欠なのです。社会的な責任を果たし続ける燃料ということです。

アフターコロナやウィズコロナという言葉には、コロナ禍以前には戻らないという意味が含まれています。漫然と元に戻ることを期待することは危険です。むしろ新しい変化に転じることが求められています。

終戦後、戦後の日本社会を創り上げようと奮闘した日本の先人たちをドラッガーは、「彼らは無私でも利他的でもなかった。むしろ利益中心だった。彼らは戦後社会のリーダーたることを自負していたわけではなかったが、「責任を負っていた」『ポスト資本主義社会』

そこにあるのは・・・日本のために一つの事業を立ち上げ、利益を上げ、雇用を守り抜き、事業を守り抜こうとする先人たちの姿です。

渋沢栄一が「論語と算盤」という、対局にあると考えられてきた異質なものを結びつけ、難局を乗り越えようとしたように私たちには課題（問題）を解決する力があるのです。



『致知』2020年12月号「仕事と人生に生かすドラッガーの教え」ドラッガー学会理事 佐藤 等

「日本の資本主義の父」と呼ばれる渋沢栄一も・・・

「真正の利殖（利益）は仁義道徳に基づかなければ、決して永続するものではない」と『論語と算盤』で論じ、利益は自分の者だけでなく他者への配慮なしに成り立たないことを名言しています。

「二極化」や「勝ち組・負け組」などの言葉がマスコミで取り上げられるなど、自由競争が加速する中、他社に勝利し、短期的に利益あげる経営者が注目され、評価される社会になってきていることを危惧していましたが、企業も・・・株主も・・・経済社会も大きくこれまでの価値観から転換（変化）していつているようですね。



企業の社会的責任とは何か。考えさせられますね。

ちなみに渋沢栄一の『論語と算盤』の「算盤」は「さんぼん」ではなく「そろばん」ですよ。